「手師学の思い出」（文を編集）　第５代校長　白鳥伊勢雄
昭和12年の春から昭和15年の春までの体験記録

１．はじめに

私は昭和12年の春赴任し、15年の春転出したので約30年昔のことです。（略）
（注：昭和８年４月１日　修業年限２ヶ年の高等科併置し、校名を手師学尋常高等小学校に改称
昭和12年４月１日、４学級編成になる

２．自転車旅行

２泊３日の予定で弟子屈・阿寒を一周するため、教練指導の石橋、中山両君と私の３人と生徒全員が朝５時に校庭に集合、点検、注意などを終わり、一同朝もやをついて元気に出発した。

（注：在籍児童数
昭和12年度161人　昭和13年度176人　昭和14年度191人
注：高等科卒業生
昭和12年度14人　昭和13年度15人　昭和14年度26人
＊「生徒全員」と書いていますが、在校生全員とは考えにくく、自転車を持っていた参加者全員、または高等科全員と考えられます）

ゆっくり行くように注意したのになかなか速い。美幌に着いて小休止、点検、それから古梅を経ていよいよ美幌峠にさしかかると、１人の生徒の自転車がパンクした。私は修理を手伝って後を追ったが、坂が急になり、その生徒はしだいに弱って自転車に乗れない。やむなく私も自転車を押して登った。見ると三々五々落伍しかかった生徒が自転車を押しているのに追いついた。私は励まし励まし、汗を流しながら進んだ。そして、やっと美幌峠の頂上にたどり着いた。

冷たい風が顔に快く、眼下には屈斜路湖の美しい景色が開け、また、雄大な山々がはるか彼方に夢のように浮かんで眺められる。その大観は筆舌で表現できないものであった。今まで弱音を吐いていた生徒も急に元気を取り戻したようである。一同はここで昼食をとった。

それからは下りばかりであるから楽であったが、残念なことにバラスを敷いたばかりの道のため、自転車のパンクの数が増えるのには閉口した。それでも本日の予定の弟子屈の宿に着いたのは陽もまだ高い時であった。この行程25里（注：１里は約４キロメートル）、一同は疲れて温泉に入り、夕食後まもなく寝床についた。

次の日は弟子屈から新しく美しい横断道路で阿寒に行き、見学して宿泊。この日の行程10里。

（注：阿寒横断道路…弟子屈から阿寒湖までの道路　昭和５年完成）

３日目の朝、起きてみると空は曇って今にも降り出しそうなようすである。出発前に雨具を着用させて早々に出かけたが、とうとう相生峠にさしかかる頃からポツポツ降り始め、峠を下る頃にはどしゃ降りになった。雷が鳴り、道路が川のように水が流れる。その中を

励ましながら美幌に着き、昼食にした。
　そんな中、雨もしだいに小降りになり、野付牛（注：北見）、仁頃を経て、夕方には一同学校に着いた。幸いにも1人の落伍者もなく、事故もなく、病人もなかったことを喜んだ。これに参加した人は今、日吉に何人いるかしら、もう50才近くなっているのだが…。

3．丁寧なご招待（略）

4．熊の話
　熊の子を手づかみにして来たという話を聞いたので見に行ったら、庭に子犬ほどの熊の子がいてヒーヒー鳴いている。平間さんが抱くと鳴きやむが、下に置くとまた鳴く。歩き方もまだヨチヨチである。
　子熊をとってきた平間さんの話
　先日、弟と2人で小貫の沢へヤマメ釣りに行って、夕方になったので山越えをして帰って来る時、山の尾根伝いに歩いてくると小熊を連れた熊がやってくるではないか。当然、自分と出会うわけだが、出会えば食われることは必定である。やむなく熊を避けて急な谷を下り始めた。ところが熊はその物音に気がついて飛びかかってきた。自分は驚いてとっさにかがんだので熊は私の頭上を通り越して、やや下を下りていた弟との中間に着地した。しかし、急な坂であるうえに勢いがついていたので止まることができない。熊は弟めがけて飛びついた。弟も腰をかがめたので熊は弟の頭をかすめて下方に飛び降りたが、その勢いで谷底まで飛んでいってしまった。そこで、置き去りにされた子熊、ヒーヒー鳴いている子熊を抱いて帰ってきた。
　というのである。（略）

5．穴熊捕りの名人の話
　ポンクマ沢の入り口の根本さんの家に同居している人がその名人だと聞いて尋ねていった。穴熊を捕るほどの名人ならば定めしいかめしい顔の人だろうと想像して会ってみると、25～26才の美青年であった。どうやって捕るのかと尋ねたら穴の中に入って鉄砲で撃って捕るのだとのことである。
問：穴に入る時は足から入るのか
答：頭から入るのだ
問：5連発銃を持って入るのか
答：単発だ
問：それでは刀は持って入るのか
答：何も他の物は持って入らない
問：打ち損じたらどうするのか
答：穴の中は狭いので、もし撃ち損じたら第2発を撃つひまも刀を抜くひまもなく、すぐに熊に食われてしまうであろう
問：半分穴に入った時にかかってこないか
答：絶対かかってこない
問：では、熊はその時どうしているのか

答：熊は向こう側の壁にしがみついて、頭だけ当方に向けてうなっている
問：穴の中は暗くないか
答：もちろん暗い。だから、中に入ったら目が慣れるまでにらめっこしているのだ。それから気を落ち着けて狙いを定めて撃つのだ
問：どこを撃つのか
答：頭を撃つのだ
問：撃ってからどうするのだ
答：穴の中は煙でいっぱいになるから頭を地に伏せて、煙の腫れるのを待つのだ
（略）

『日吉小学校60周年・日吉中学校20周年記念誌』（昭和42年11月発行）掲載